

水とくらし

-坂本とつつみ-



坂小・4年

坂本地区には、つつみがいっぱいあります。

みなさんの中には、近くのつつみへ、ざりがにとりや魚つりに行った人もいます。

。どうしてこんなにくさんのつつみがあるのでしょうか？
。つつみの水は、何に使うのでしょうか？

十一月二日(日)の親子行事の時に

源根つつみへ行きます。

勉強の材料ですから、しっかり読みましょう。

※父母の皆様へ

子供と一緒に読んでおいて下さい。

出来上った水路



源根

のつつみ

(源根のため池)

源右衛門の伝説

今から二百数十年前 坂本村茄子川下洗井地域しもあらいちいきに源右衛門とい
う人が住んでいました。

その人は、かなりお金持ちでゆたかな生活をしていました。学
問もあり、区長くちょうとして近所の人々にも知られ信用しんようもされて、みん
なにたよりにされていきました。

そのころ下洗井は、とても水がなく下洗井の人々は、大変水に
こまっていました。毎年 水あらそいや水の取り合いがたえませ
んでした。

ある年——水のことで、源右衛門と下洗井の人は、大げんかを
してしまいました。

げんいんは、下洗井の人は、

「今すぐ 水がほしい。」

と、いい、源右衛門は、

「今すぐ水のいることは、わかるけどみんながずっ、とこまらない
ように、どうしたらいいのか、考えたほうがいい。」

と、いい合い、さいごまで意見があいませんでした。

源右衛門は、思いきってすみなれた下洗井の地をはなれ、今の
源根のある土地へ、ひっこしていききました。

源右衛門は、たった一人で、茄子川一帯にたっ、ぷり水がゆきわ
たるように水源池すいげんちになる大きなため池を作っ、て茄子川いゅうの人
人から水のないくるしみをなくそう、と決心しました。

次の日から、源右衛門は、一人でため池のせっけい図をかき、
毎日毎日一人でコッコツとため池づくりにはげみました。

源右衛門は、だんだん年を取り、はげしい労働らうどうへしごと、のた

めに ため池が完成しないうちに 一人さびしくこの世を去って
しまいました。

源右衛門が死んだころ下洗井の人々も やっと源右衛門の意見
の正しか。たことに 気がつきはじめました。

そして かえらぬな。た源右衛門の死をいたんで のちのせま
で 源右衛門をしのぶ石ひを源根つつみのそばに建てました。
今も村人が 花をあげています。

— 昭和十一年に工事がはじまり昭和十三年に完成—
源根のつつみのない頃は、茄子川、津戸井、野田川上流と滝ヶ
洞上流の井掛りの水田は、毎年毎年の水不足にこまりはてていま
した。
晴天がつづくときと田植前の仕事もできず、苗もかれたり、ひびわ
れたり、ひどい年は、お盆の近くになっても田植ができないあり

さまでした。

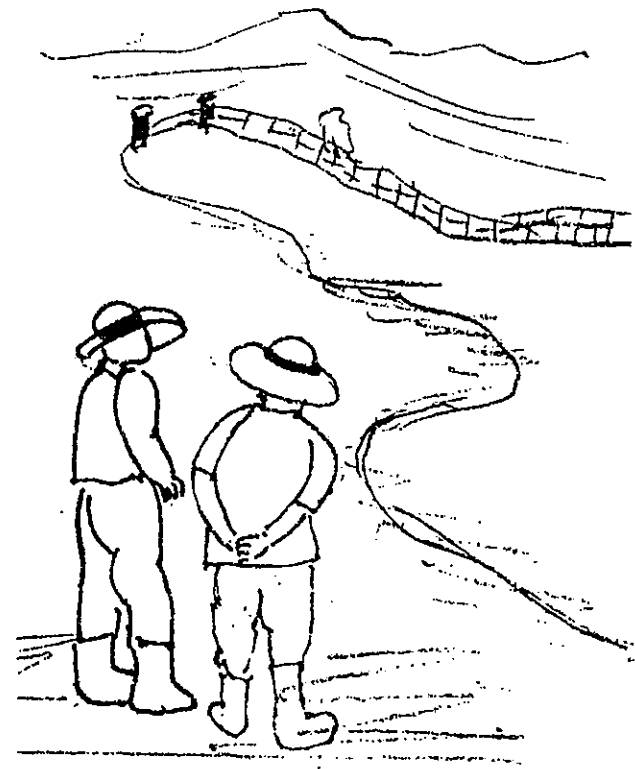
あちらでも こちらでも 水げんかがたえませんでした。

そのころ坂本村の助役をしておられた勝孫三郎さんは、この水
不足を何とかなくそうと考え野田川用水の利用者の最も有力な人
達と何度も相談をして、ため池を作ろうと考えました。

いろいろな場所を調べた結果、保古の湖の下に昔、武家の落人
が住んでいたという今の源根がいちばんよいということにきまりま
した。

「源根ため池築造組合」の日記には、反対の地主たちと何度も
話し合い協力してもらったために、くろうした記録が残されていま
す。何度も県庁へ出むいて許可をもらったことも記されています。
やっこゆるじが出た時には、当時の新聞に大きく出たそうです。

新聞記事から
 坂本村源根原に
 大貯水池を造築
 昭和11年3月 起工
 昭和13年 完成
 工費 25,000円
 てほうの長さ平均 131m
 つつみの高さ平均 6m
 貯水量 99,000cm



肩と背中で作ったつつみ

「何とか 水がほしい。」

坂本の農民のせつないまでの思いで、みんなが心をあわせてつくりあげたつつみです。なにしろ保古の湖に近い山の中の工事です。

今のようにトラックも、ダンパーカーも、シヤベルカーもない時代です。まず最初は、工事を使う資材（材料）やきかいをはこぶことでした。

急な細い山道を農民たちは、家を夜明けの四時半にでて、しやがいや、きかいをかっいだり、せおったりして、げん場まではこびあげました。

これは、あさわがといって給料にうわのせしてもらいました。トロッコのレール一本（34kg）をかっぎあげると十七銭、車輪は

二十銭でした。セメント袋は、五十銭でした。重さによって、はこぶお金がきまっています。

セメントは、だんまといって馬の背中にくらをつけてはこびました。

コンクリート用の砂まやバラス(小石)は、石油ばこではこびました。

砂は、五百メートル下流であらい流し、バラスは、ハンマーでくだいてつくり急な坂道をはこびあげました。

毎日作業員は、五十人ぐらい。男子は二十才から四十才ぐらいの人がみんなはたらきに出ました。女の人もしょに仕事をしました。女の方は日によってちがいました。五十ぐらいの仕事は朝六時から夕方の六時まで十二時間はたりました。昼休みは、四十分ありました。とてもたのしみにしていました。

女の方は、はがね打ちへ赤土でかためる(作業で若い娘たちも

あねさんがぶりに、赤だすき、もんぺにひの木のかさをかぶり、音頭おんがしらの唄うたに合わせて、土うちをしました。

女の方は、一日はたらい若い人で十七銭、中年の人で二十七銭ぐらいでした。当時は、ほかに銭もうけがなかったので、みんなうばい合いでたりました。

まずしい農民には、のうかんきの収入しゅうにゅうにもなり、つらい仕事でしたが、だいたいな現金収入げんきんしゅうにゅうでした。みんなではげまし合って、はたらきました。

つみ作り

つみほりは、スコップ、くわ、つるはしが主な道具どうぐでした。土は、もっこやトロッコではこびました。

トロッコは、まくら木を打ちレールを千二百メートルつないで土を運び出しました。トロー台で土を運ぶと十八銭で、こま札わ

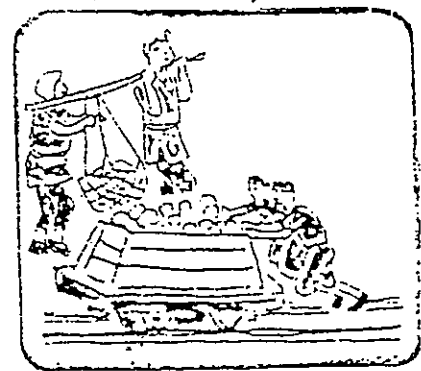
たしの人かいて、台数を調べて給料をはらってくれました。
 ため池の内作業は、ていぼうのもり土とはがねがための作業で
 した。たくさんのだき土へまわりに入れる土をトロッコではこ
 びました。

はがねうちは、女の人の仕事でした。はがねをした所は、ちよ
 っとのことでは、こわれないとてもしょうぶなものでした。

底は根堀（ねほり）といって、さば土のでるまでほって、そこから
 はがねをうちました。水が出るとバラスを入れて、たたいて三歩あるい
 てつちを打ち、かためていきました。

暑い夏も、寒い冬もはたらき通して三年間。
 みんなの汗こどりよくで、ついに源根のつつみ
 へため池）は、完成しました。

今では、日でりがつづいても、もうすぐ源
 根のつつみのせんをぬくでな……と、水の心

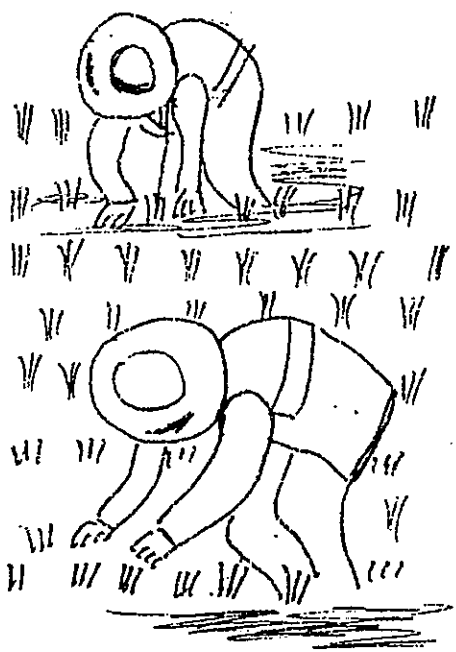


モッコとトロッコ押し

配（い）をしなくても安心して、田植ができるようになりました。

源根のつつみは、茄子川と恵那市東野根の上高原テレビ中けい
 所より西（せい）がハ（は）のメートルのところにあります。

この水は、野田川に入って、十二の用水にわかれ四十五町歩
 （四十五ヘクタール）の田畑にくばられています。



源根のつつみへ

はがね打ちに行った

東町

藤原 てつ

わたしは、恵那から坂本の茄子川へ嫁にきました。ちようご主人が源根のつつみをつくるかんどくをしていたので、お前も貸とりに行け。

と言われ、生まれてはじめて貸とりというものに行きました。

その頃は、女の人が外へ仕事に出る（はたらきに行く）ということがめずらしかつたので、貸とりに行きたいという人はたくさんいました。が十五人位しかいけませんでした。

朝六時に家を出て、八時から五時まで仕事をしました。家へ帰って夕ごはんの支度をしたり、せんたくをしたり、女の人はいへんでした。

その頃、「牛の鼻とり」という仕事があって一日働いて一円二十

銭もらえました。源根の仕事は、それより安かつたが、一ヶ月働くとまとまったお金がもらえました。

仕事の内容は、はがね打ちです。女の人が四人位ずつ横に並んで、木の槌で土手へ赤土を打ちこんでいく仕事です。これは、つつみの水がもれないようにする大事な仕事です。

赤土を打ちこんだ上へ、また赤土をのせ、また打ちこんでいくという具合に、ごんごん打ちこんでいきます。

赤土は、水を通しません。セメントの代わりに赤土を打ちこんで、つつみの土手をつくっていきました。

その時、うたをうたいながら仕事をしました。それは、みんなの力がうまく合うように、うたに合わせて打っていくのです。

うたは、きまわったうたではなく、その時、その時の気分に合わせて、即興（そくきやう）その場でうたをつくるのでつくったうたをうたいました。だれか上手な人がうたい出すとそれに合わせてみんながつ

いて、うたって行くのです。ですから一日のうちに何ぶんも同じうたをうたいました。

きょうは良かったとか、わるかったとか言っては、思いついたことをうたにしていきました。

うた「朝は、はよから弁当べんどうばこさげて、あーこらせーこらせー」。
(トントン)と二回槌つちで赤土を打ちこみます。

うた「下を見おろせば、なすび川

あーこらせーこらせー」。

(トントン)とまた二回打ちます。

こうして、うたいながらトントンとはがね打ちをしていくのです。



男の人は、もっこやトロッコで土や石をはこぶ力仕事をしました。セメントぶくろやレールなどを山の下からはこび上げるのも男の人の仕事でした。

こうした大ぜいの人々のどりよくにより、今のようなりっぱなつつみができあがり、いねが豊ゆたかかにみえるようになりました。

